

Confidential

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

「2015 年度在宅医療推進のための会」

報 告 書

年間テーマ

地域包括ケアシステムと病院医療

～病院と地域との連携をいかにして強化するのか～

座長：蘆野 吉和 氏

(社会医療法人北斗 地域包括ケア推進センター長)

— 目 次 —

■はじめに（座長：蘆野吉和氏）	1 P
■参加委員名簿	2 P
■第1回研究会（5/22）＜緩和ケアにおける地域連携＞	5 P
・谷水 正人氏「緩和ケア病棟の役割・がん拠点病院の役割」	
・亀井 敏光氏「緩和ケア病棟の役割について」 ～松山市医師会における在宅医療推進への取組みの歴史と今～	
・小枝 淳一氏「青森市における緩和医療」 ～特にホスピス病棟の役割の変遷に焦点をあてて～	
■第2回研究会（6/26）＜急性期病院の後方連携を充実させるための方策について＞	2 7 P
・宇都宮 宏子氏「退院支援のプロセスと院内システム構築、地域との協働」 ～7日問題の弊害、連携協働評価へ～	
・湯澤 克氏「病院における地域医療福祉連携」～MSWの役割と視点～	
■第3回研究会（7/24）＜神経難病における地域連携のあり方について＞	5 3 P
・石垣 泰則氏「在宅医からの発信」	
・横山 和正氏「地域包括ケアシステムと病院医療」 ～病院と地域との連携をいかにして強化するか～	
■第4回研究会（9/25）＜認知症における地域連携＞	7 7 P
・栗田 主一氏「認知症高齢者等にやさしい地域とは何か」	
・平原 佐斗司氏「認知症の旅路を支え続ける医療」	
■第5回研究会（10/23）＜がん治療と在宅医療との接点＞	1 0 9 P
・高橋 慶一「がん治療と在宅医療との接点」～抗がん剤治療をいつ止めるのか～	
・勝俣 範之「がん治療と在宅医療との接点」～抗がん剤治療をいつ止めるのか～	
■第6回研究会（12/25）＜病院看護と在宅医療＞	1 3 5 P
・角田 直枝氏「病院看護と在宅医療」	
・山田 雅子氏「病院看護と在宅医療」	
■第7回研究会（1/22）＜小児在宅医療推進のための会合同勉強会＞	1 6 1 P
・前田 浩利氏「小児在宅医療の現状と課題」	
・奈倉 道明氏「行政の視点から見た小児在宅医療」	
・位田 忍氏「小児在宅医療推進のための会（大阪分科会）報告」	
・佐々木 昌弘氏「THE 卒前教育」～医歯薬看の学生は今～	
■第8回研究会（2/26）＜病院歯科と地域歯科診療所の連携＞	1 9 5 P
・吉村 光弘氏「院内歯科の役割と地方在宅医療の現状」	
・長谷 剛志氏「病院歯科として地域で担うべき役割とは」 ～超高齢社会における「地方型」在宅歯科医療の道標～	
・西村 元一氏「がん治療医が患者になって見たもの考えたこと」（特別報告）	

## 2015年度「在宅医療推進のための会」報告書

座長 蘆野吉和

昨年度（2014年度）は「地域包括ケアシステムと病院医療～川上から川下までのネットワーク化～」というテーマで開催しましたが、急性期病院と地域との連携にはまだまだ多くの解決すべき課題があることより、今年度も引き続き「地域包括ケアシステムと病院医療～病院と地域との連携をいかにして強化するのか～」というテーマで疾患や職種の違いに焦点をあてて以下のような年間プログラムを作成し、このプログラムに沿って、8回の勉強会を開催しました。

第1回（5月22日開催）は「緩和ケアにおける地域連携—緩和ケア病棟の役割について—」というサブテーマで緩和ケア領域特に緩和ケア病棟と地域の連携に焦点をあてました。第2回（6月26日開催）は「急性期病院の後方連携を充実させるための方策について」というサブテーマで、急性期病院の地域連携部門と地域との連携に焦点をあてました。第3回（7月24日開催）は「神経難病における地域連携のあり方について」というサブテーマで神経難病における地域連携、特に急性期病院の専門医と在宅医の連携に焦点をあて、意思決定支援も含むいくつかの課題について検討しました。第4回（9月25日開催）は「認知症における地域連携」というサブテーマで認知症におけるかかりつけ医と専門医との連携に焦点をあてて検討しました。第5回（10月23日開催）は「がん治療と在宅医療との接点—抗がん剤治療をいつ止めるのか—」は、がん専門医2名に抗がん剤治療の現状と治療中止の要件等についてお話を伺うとともに在宅医療への移行を含めた今後の課題について検討しました。第6回（12月25日開催）は「病院看護と在宅医療」というサブテーマで、急性期病院の看護師の意識変容をどう進めるのか、訪問看護師の育成をどのように行うかについて検討しました。第7回（1月22日開催）は昨年と同様の小児在宅医療との合同勉強会に加え、急遽、2015年に厚生労働省から文部科学省高等教育局医学教育課に移動された佐々木昌弘氏から、卒前の医学教育カリキュラムに関する話題提供がありました。また、最後の第8回（2月26日開催）は「病院歯科と地域歯科診療所の連携」というサブテーマで、病院歯科医師と地域の医科および歯科との連携および地域における食支援についての話題提供を受けていくつかの課題について討論が行われました。また、特別報告として当勉強会の委員である西村元一氏より、ご自身のがん治療体験「がん治療医が患者になって見たもの考えたこと」の報告がありました。

いずれのプログラムにおいても、話題提供者の非常にアトラクティブで、魅力的で、今後の地域社会に必要な高い様々な取り組みが報告され、また、委員からも同様の追加報告やコメント、および有意義な質疑応答がなされ、座長としては非常に有意義な時間を過ごさせて頂きました。

なお、昨年に比べ、委員およびオブザーバー参加も多くなり、また、各月プログラムでは2～3名の話題提供者にお話していただいたため、残された討論の時間も少なく、参加している方々に十分な質疑やコメントなどを頂くことができなかつたことをお詫びするとともに、話題提供を引き受けてくれた諸先生方に深く感謝したいと思います。

また、この会を企画、準備してくれた在宅医療助成勇美記念財団の事務局の方々にも心から感謝いたします。

「2015年度在宅医療推進のための会」参加委員名簿 (2016年3月当時)

氏名	所属	役職
★あしのよしから ★蘆野 吉和	社会医療法人北斗 北斗病院/十勝リハビリテーションセンター	在宅医療科部長/在宅医療支援センター長
いいじまかつや 飯島 勝矢	東京大学 高齢社会総合研究機構	准教授
いおすお 井尾 和雄	医療法人社団在和会 立川在宅ケアクリニック	院長
いけがきじゅんいち 池垣 淳一	兵庫県立がんセンター	緩和医療担当部長
いとう じゅんいちろう 伊藤 順一郎	メンタルヘルス診療所しつぽふあーれ	院長
いのくちゆうじ 猪口 雄二	公益社団法人 全日本病院協会	副会長
うつのみやひろこ 宇都宮 宏子	在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス	代表
おおしましんいち 大島 伸一	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター	名誉総長
おおしまひろこ 大島 浩子	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 在宅医療開発研究部	長寿看護・介護研究室長
おおた ひでき 太田 秀樹	医療法人 アスミス	理事長
おおはしえいじ 大橋 英司	医療法人社団 大橋内科胃腸科	理事長
おがわ としこ 小川 聡子	医療法人社団 東山会	理事長
かわい まこと 川井 真	一般社団法人 JA共済総合研究所	主席研究員
かわしま こういちろう 川島 孝一郎	仙台往診クリニック	院長
きたざわ あきひろ 北澤 彰浩	佐久総合病院	診療部長
きんたいち せいこ 金田 一成子	一般社団法人 日本女性薬剤師会	副会長
くろいわ たくお 黒岩 卓夫	医療法人社団 萌気会	理事長
くわはら なおゆき 桑原 直行	秋田県厚生医療センター	脳神経外科診療科長
こえだ じゅんいち 小枝 淳一	社団法人慈恵会 青森慈恵会病院	緩和ケア統括部長
こじま はじめ 小嶋 一	医療法人 深仁会 手稲家庭医療クリニック	院長
こだま つよし 小玉 剛	こだま歯科医院	院長
☆さとう あきら ☆佐藤 智	一般社団法人 ライフケアシステム	会長
しまざき けんじ 島崎 謙治	政策研究大学院大学	教授
しみず まさかつ 清水 政克	清水メディカルクリニック	副院長
すずき たかお 鈴木 隆雄	桜美林大学 加齢・発達研究所	所長
すずき ひろし 鈴木 央	鈴木内科医院	院長
たかた つねお 高田 常雄	公益社団法人 東京都鍼灸師会	会長
たしろ たかお 田城 孝雄	放送大学教養学部 / 順天堂大学	教授 / 客員教授
たなか しげる 田中 滋	慶應義塾大学	名誉教授
たみず まさひと 谷水 正人	独立行政法人 国立病院機構 四国がんセンター	副院長
つじ てつお 辻 哲夫	東京大学 高齢社会総合研究機構	特任教授
つちはし まさひと 土橋 正彦	土橋医院	院長
つるおか ゆうこ 鶴岡 優子	つるかめ診療所	所長
とば けんじ 鳥羽 研二	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター	理事長
ながい やすのり 永井 康徳	医療法人 ゆうの森 たんぽぽクリニック	院長
ながお かずひろ 長尾 和宏	医療法人社団 裕和会 長尾クリニック	院長
なぐら みちあき 奈倉 道明	埼玉医科大学総合医療センター小児科	講師
にしだ しんいち 西田 伸一	医療法人社団 泉社会 西田医院	院長
にしむら げんいち 西村 元一	金沢赤十字病院	副院長
はぎた ひとし 萩田 均司	有限会社メディアエニックスコーポレーション	代表取締役
はなぶさ ひろお 英 裕雄	医療法人社団 三育会	理事長
はらくち まこと 原口 真	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター	企画戦略局長
はらだ あつし 原田 敦	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター	病院長
ひらはら さとし 平原 佐斗司	東京ふれあい医療生協 梶原診療所	在宅サポートセンター長
ふじた しんすけ 藤田 伸輔	国立大学医療連携・退院支援関連部門連絡協議会 千葉大学医学部附属病院 地域連携部	教授
ほその じゅん 細野 純	細野歯科クリニック	院長
ほった さとこ 堀田 聡子	国際医療福祉大学大学院	教授
べにや ひろゆき 紅谷 浩之	オレンジホームケアクリニック	代表
まつしま だい 松嶋 大	ものがたり診療所 もりおか	所長
みづら ひさゆき 三浦 久幸	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター	在宅連携医療部長
みづら まさえつ 三浦 正悦	医療法人 心の郷	理事長
やなざわ かつひこ 柳澤 勝彦	国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 研究所	所長
やまなか たかし 山中 泰	東京大学 医学部在宅医療学拠点	特任准教授
わた だだし 和田 忠志	医療法人社団 実幸会 いらはら診療所	在宅医療部長
わたなべ しやう 渡辺 象	医療法人社団 じゅんせいクリニック	院長

★座長、☆相談役

厚生労働省等

	氏名	所属	役職
1	いとう しょういち 伊藤 正一	厚生労働省 医政局 地域医療計画課 在宅医療推進室	研修生
2	えの ひでお 江野 英夫	厚生労働省 医政局 医療経営支援課	課長補佐
3	ごとう とちみ 後藤 友美	厚生労働省 医政局 地域医療計画課 在宅医療推進室	在宅看護専門官
4	きこい まさみ 追井 正深	厚生労働省 医政局 地域医療計画課	課長
5	ささき まさひろ 佐々木 昌弘	文部科学省 高等教育局 医学教育課	企画官
6	しろうす なち 白水 那智	厚生労働省 医政局 地域医療計画課 在宅医療推進室	在宅医療係
7	たかだ しゅんこ 高田 淳子	厚生労働省 医政局 歯科保健課	歯科医師臨床研修専門官
8	たけだ としひこ 武田 俊彦	厚生労働省 大臣官房	審議官(医療保険担当)
9	はつどり しんじ 服部 真治	厚生労働省 老健局 総務課	課長補佐
10	はくの はるひこ 伯野 春彦	厚生労働省 医政局 地域医療計画課 在宅医療推進室	室長
11	ふじもと こう 藤本 晃	厚生労働省 医政局 地域医療計画課 在宅医療推進室	在宅医療係長
12	ほそかわ こうじ 細川 康二	厚生労働省 医政局 地域医療計画課	課長補佐
13	みつら こうじ 三浦 公嗣	厚生労働省 老健局	老健局長
14	みやじま としひこ 宮島 俊彦	内閣官房 社会保障改革担当室	室長
15	やまくち みちこ 山口 道子	厚生労働省 医政局看護課看護サービス推進室	室長補佐
16	よしの たかし 吉野 隆之	九州厚生局	局長
17	わたなべ ゆみこ 渡辺 由美子	厚生労働省 保険局 医療介護連携政策課	課長

(50音順・敬称略)

	氏名	所属	役職
1	かみや かずこ 上家 和子	大阪府 健康医療部	部長
2	わたなべ けんいちろう 渡辺 顕一郎	奈良県 医療政策部	部長

(50音順・敬称略)

## 第1回「2015年度在宅医療推進のための会」

### 【緩和ケアにおける地域連携】

話題提供：

谷水 正人 氏

四国がんセンター 副院長

「緩和ケア病棟の役割・がん拠点病院の役割」

亀井 敏光 氏

医療法人友愛医院 理事長

「緩和ケア病棟の役割について」

～松山市医師会における在宅医療推進への取組みの歴史と今～

小枝 淳一 氏

青森慈恵会病院 緩和ケア科 統括部長

「青森市における緩和医療」

～特にホスピス病棟の役割の変遷に焦点をあてて～

日 時： 平成 27 年 5 月 22 日（金） 19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内 1-7-12 サピアタワー5F  
ステーションコンファレンス東京 503CD 会議室

## ＜第1回 勉強会 5月22日開催 参加者 委員44名、オブザーバー14名＞

### ■第1回勉強会のテーマ

「緩和ケアにおける地域連携—緩和ケア病棟の役割について—」

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 谷水正人氏（四国がんセンター 副院長）

緩和ケア病棟における地域連携—緩和ケア病棟の役割・がん拠点病院の役割

プレゼンテーション2 亀井敏光氏（松山市医師会 地域連携部主任理事）※5月22日当時

松山医師会における在宅医療推進への取り組みの歴史と今

プレゼンテーション3 小枝淳一氏（慈恵会病院 緩和ケア統括部長）

青森市における緩和医療～特にホスピス病棟の役割の変遷に焦点をあてて

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第1回勉強会は、緩和ケア病棟と地域との連携の現状とその課題について共通理解を深め、課題解決のための戦略について検討しました。

今回の話題提供者は、四国がんセンター副院長 谷水正人氏、松山医師会地域連携部主任理事 亀井敏光氏、青森慈恵会病院緩和ケア科統括部長 小枝淳一氏の3名です。谷水氏は四国がんセンターに所属していますが、施設内だけでなく愛媛県全体のがん医療体制の構築および緩和ケア提供体制の構築のため、そして全国的なフィールドで、在宅緩和ケアやがん連携パス等の普及に尽力されています。また、それに伴走する形で地区医師会（松山市医師会）が積極的に在宅医療の普及に取り組んでいます。今回は、四国がんセンターの緩和ケア病棟の現状とその運営の理念等について谷水氏に、松山医師会の平成4年度からの在宅医療の取り組みと、現在取り組んでいる愛媛県在宅緩和ケア推進モデル事業について亀井氏に、そして、別の現状として、青森市で緩和ケア病棟と在宅緩和ケアの両者を展開し、緩和ケアを取り巻く環境が整備されていない中で地域の緩和ケア普及に尽力されている小枝氏に話題提供していただきました。

今回の企画は、現在の日本で展開されている緩和ケアのあり方（施設完結型緩和ケア）に懸念をもち、地域を視野においた緩和ケア（地域緩和ケア）の普及が今後の地域包括ケアシステム構築においても非常に重要な課題であるとの認識から、特に緩和ケア病棟と在宅医療を含めた地域との連携のあり方（現状および将来の方向性）に焦点をあてました。

話題提供者の講演内容およびその後の討論は今後の対応（戦略）を考える上で内容の濃いものでしたが、特に、印象深い項目として以下列挙します。①緩和ケア病棟として、急性期対応と慢性期対応の二つのあり方があり、がん拠点病院はすべて急性期対応の緩和ケア病棟を運営すべきという提言、②在宅緩和ケアで対応できるのであれば何故緩和ケア病棟が必要なのか議論することが大事である、③地区医師会と急性期病院の連携により、在宅緩和ケアの地域連携体制を構築することは不可能ではないこと（在宅緩和ケア推進モデル事業）、④地域における専門的緩和ケアチームが必要である、等です。

## 第2回「2015年度在宅医療推進のための会」

【急性期病院の後方連携を充実させるための方策について】

話題提供： 宇都宮 宏子 氏  
在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス代表  
「退院支援のプロセスと院内システム構築、地域との協働」  
～7日問題の弊害、連携協働評価へ～

湯澤 克 氏  
岩手県立宮古病院 地域医療福祉連携室 MSW  
「病院における地域医療福祉連携」  
～MSWの役割と視点～

日 時： 平成27年6月26日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605BC 会議室



## <第2回 勉強会 6月26日開催 参加者 委員37名、オブザーバー16名>

### ■第2回勉強会のテーマ

「急性期病院の後方連携を充実させるための方策について」

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 宇都宮宏子氏（在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス 代表）  
退院支援のプロセスと院内システム構築、地域包括ケアシステムとの連携  
～7日問題の弊害、連携協議評価へ～

プレゼンテーション2 湯澤克氏（岩手県立宮古病院 地域医療福祉連携室 MSW）  
病院における地域医療福祉連携～MSWの役割と視点～

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第2回勉強会は、急性期病院の後方連携を充実させるためにどのような工夫や人員配置あるいは体制が必要なのかについて、現状における問題や今後の課題について共通理解を深め、課題解決のための戦略等について検討しました。

今回の話題提供者は在宅ケア移行支援研究所宇都宮宏子氏と岩手県立宮古病院地域医療福祉連携室湯澤克氏の2名です。宇都宮宏子氏は訪問看護の経験より在宅ケアの重要性と急性期病院における退院調整の必要性を実感し、平成14年から京都大学附属病院の「退院調整看護師」として活動した後に、平成24年に「在宅移行支援研究所」を起業し、現在、医療機関の「在宅移行支援」等、当事者目線での退院支援／退院調整の普及のため全国を飛び回っています。湯澤克氏はダイハツの営業から病院の社会福祉の行政職に転職し、約7年で岩手県だけでなく東北地区の地域医療連携のネットワークを構築するなど地域色のあるユニークな活動を展開しています。

今回の企画では、現在、急性期病院の多くが地域連携部門を擁し地域連携に取り組んでおり、前方連携についてはかなりしっかりした連携が図られているものの、後方連携についてはかなり対応が遅れており、そのために在宅医療が普及していないとの認識のもと、この後方連携を強化するための課題の抽出と課題解決の具体的戦略に焦点をあてました。

話題提供者の講演内容とその後の討論で特に今後重要と思われる事項として、①退院支援の意味は「病気・障害・老いをもってどう生きていくかを定めるプロセスであること」（宇都宮氏）、②そのためには、入院前の生活情報が必要不可欠であること、③入院時に入院後のADLやIADLの予測を立てることも重要であること、④入院時のアセスメント（チェックシートを使った形だけのスクリーニングではなく）とそれを病棟でのアセスメントにうまくつなげることが必要であること、⑤今後は外来通院時で適切なアセスメントを行い必要に応じて早期に地域連携につなげ（在宅療養支援）、できるだけ入院を回避する仕組みを作ることが必要となってくること、⑥病院長等の直轄として地域連携部門のしっかりした体制づくりが必要であること、⑦MSWの教育体制の確立と国家資格を含めた資格制度の確立が必要であること、⑧診療所等の地域医療機関のソーシャルワーカーによる地域連携も在宅医療を進めるためには重要な役割をもっていること 等が印象に残りました。

## 第3回「2015年度在宅医療推進のための会」

### 【神経難病における地域連携のあり方について】

話題提供： 石垣 泰則 氏  
医療法人社団 泰平会 理事長  
「在宅医からの発信」

横山 和正 氏  
順天堂大学医学部 脳神経内科 臨床講師  
「地域包括ケアシステムと病院医療」  
～病院と地域との連携をいかにして強化するか～

日 時： 平成27年7月24日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605BC 会議室

## <第3回勉強会 7月24日開催 参加 委員34名 オブザーバー 7名>

### ■第3回勉強会のテーマ

「神経難病における地域連携のあり方について」

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 石垣泰則氏 (医療法人社団泰平会 理事長)

神経難病における地域連携のあり方について～在宅医からの発信～

プレゼンテーション2 横山和正氏 (順天堂大学医学部脳神経内科 臨床講師・日本在宅医学会事務局長)

地域包括ケアシステムと病院医療—病院と地域との連携をいかにして強化するか—

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第3回勉強会は、神経難病における病院（専門医）と在宅医の連携について、その現状と今後の課題について共通理解を深め、課題解決のための戦略等について検討しました。

今回の話題提供は、神経内科の専門医であり在宅医でもある石垣泰則氏と順天堂大学医学部脳神経内科多発性硬化症および神経難病治療・研究講座講師の横山和正氏の2名です。

今回の企画では、神経内科の在宅医療においては急性期病院の専門医との連携が必要不可欠と考えられますが、その現状について、連携を進めるための課題の抽出と、具体的戦略について検討することに焦点をあてました。

話題提供者の講演内容とその後の討論で、特に今後重要と思われる事項として、①神経難病の治療やケアにおいては専門医の存在が必要不可欠であること、②難病であるがゆえにケアが重要となるにもかかわらず在宅移行のためのシステムが整備されていないこと、③長期ケアとなり寿命がのびていることにより認知症を合併している人が増えていること、④神経難病の在宅ケアにおいては多職種協働および地域ボランティアの育成が必要であること、⑤神経難病の在宅専門チームの育成も必要であること、⑥自然経過として人工呼吸管理等の意思決定の問題があるにも関わらず、誰が意思決定支援を行うかがあいまいとなっており、その場しのぎの対応となっており、ACPを含めた意思決定支援の普及が重要な課題であること、⑦意思決定支援やグリーケアを含めた家族のケアも重要な課題であること、⑧在宅医が意思決定支援も含めて早期にかかることで、終末期にも十分対応できること、⑨そのためにも神経難病の在宅医療のガイドラインの作成とその周知が必要なこと 等が印象に残りました。

## 第4回「2015年度在宅医療推進のための会」

### 【認知症における地域連携】

話題提供： 栗田 主一 氏  
東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長  
「認知症高齢者等にやさしい地域とは何か」

平原 佐斗司 氏  
東京ふれあい医療生活協同組合 副理事長  
「認知症の旅路を支え続ける医療」

日 時： 平成27年9月25日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605BC 会議室

## <第4回勉強会 9月25日開催 参加者50名 オブザーバー10名>

### ■第4回勉強会のテーマ

認知症における地域連携

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 栗田主一氏

(東京都健康長寿医療センター 自立促進と介護予防研究チーム 研究部長 )

「認知症高齢者等にやさしい地域とは何か」

プレゼンテーション2 平原佐斗司氏

(東京ふれあい医療生活協同組合 副理事長 オレンジほっとクリニック所長  
地域連携型認知症疾患医療センター)

「認知症の旅路を支え続ける医療」

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第4回勉強会は 認知症の地域連携、専門医と在宅医を含めたかかりつけ医の連携についてその現状と今後の課題について共通理解を深め、課題解決のための戦略等について検討しました。

今回の話題提供者は東京都健康長寿医療センター精神科栗田主一氏と東京ふれあい医療生活協同組合副理事長 オレンジほっとクリニック所長 / 東京都地域連携型認知症疾患医療センター平原佐斗司氏の2名です。栗田主一氏は 東京都健康長寿医療センター認知症疾患医療センター長を兼務されていますが、今回の話題提供でもその一端が提示されたように、「高齢者が尊厳をもって、すこやかに、安全に暮らすことができる地域社会の創造」のための「たとえ疾病に罹患しても、必要な医療、介護、住まい、日常生活支援等のサービスを統合的に提供することができる地域包括ケアシステムの構築」を目指した、認知症の統合支援体制構築に関する政策研究に長年かかわっており、平原佐斗司氏はがん疾患も含めた在宅医療の普及に尽力されていますが、今回の講演では認知症についての幅広い、さまざまな視点からの活動を紹介してくれました。

話題提供者の講演内容とその後の討論で、特に今後重要な視点として印象深かった項目は、①認知症はコモンディゼーズであるという認識、②コモンディゼーズであるがゆえに医療従事者であれば誰でもプライマリケアとして対応できる医療体制が今後必要となる一方で専門家がサポートする体制構築も同時に必要であること、③認知症の初期に複雑化のプロセスが始まるため、「適切な支援を適切なタイミングで適切な場所で統合的に行う地域体制を整備する必要があること、④認知症の生活支援として対人関係支援と情緒的・情動的・手段的サポートを統合的・継続的に提供できる地域づくりが重要であること、⑤認知症のステージアプローチを理解し、多職種で寄り添い続けながらケアすることが重要であること、⑥家族支援も重要であること、⑦認知症の初期診断には、診断後の診断をシェアする体制、同時に初期介入／早期支援の体制の存在が望ましいこと、等などでした。

## 第5回「2015年度在宅医療推進のための会」

【がん治療と在宅医療との接点】

～抗がん剤治療をいつ止めるのか～

話題提供：

高橋 慶一 氏

がん・感染症センター都立駒込病院外科 大腸外科部長

勝俣 範之 氏

日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科部長・教授

日 時 : 平成27年10月23日(金) 19:00～21:00

場 所 : 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605BC 会議室

## <第5回勉強会 10月23日開催 参加 委員38名 オブザーバー10名>

### ■第5回勉強会のテーマ

がん治療と在宅医療の接点—抗がん剤治療をいつ止めるのか—

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 高橋慶一氏 (がん・感染症センター 都立駒込病院外科 大腸外科部長)

がん治療と在宅医療の接点—抗がん剤治療をいつ止めるのか—

プレゼンテーション2 勝俣範之氏 (日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科部長・教授)

がん治療と在宅医療の接点

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第5回勉強会は、抗がん剤治療の現状と現時点における日本の抗がん剤治療中止の基準等についての共通理解を深め、抗がん剤治療中止および在宅医療への移行に関する課題と課題解決のための戦略について検討しました。

今回の話題提供者は都立駒込病院外科高橋慶一氏と日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科教授勝俣範之氏の2名です。高橋慶一氏は大腸がん外科治療の第一人者であり、主に大腸がん治療の現状について話題提供していただきました。また、1990年代より在宅がん治療の普及に尽力されていることより、今後の在宅がん治療の方向性についてもお話していただきました。勝俣範之氏は分子標的薬治療の第一人者ですが、緩和ケアはがん治療に含まれること、抗がん剤治療中止におけるコミュニケーションに焦点をあててお話していただきました。

今回の企画は、進行したがん患者に対して抗がん剤治療が死の直前まで継続され、そのまま病院で亡くなる経過をたどっている現状、あるいは治療を中止して在宅医療に移行しても短期間で亡くなっている現状を念頭に置いています。

話題提供者の講演内容とその後の討論で、特に印象深く感じた項目は、①抗がん剤中止の判断基準が治療医によって異なっていること、②治療医が抗がん剤中止を説明することが困難であること、③緩和ケアはがん治療の一つであるとの認識をがん治療医および国民にもってもらうことが必要であること (勝俣氏)、④不適切な(過剰な)抗がん剤治療を止めるためには、がん治療におけるチーム医療の確立、あるいはプライマリケア医がかかわる(意思決定支援にかかわる)仕組みづくりが必要であること 等でした。

## 第6回「2015年度在宅医療推進のための会」

### 【病院看護と在宅医療】

話題提供： 角田 直枝 氏  
茨城県立中央病院 茨城県地域がんセンター 看護局長

山田 雅子 氏  
聖路加国際大学大学院看護学研究科 教授

日 時： 平成27年12月25日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605BC 会議室



## <第6回勉強会 12月25日開催 参加者 39名 オブザーバー8名>

### ■第6回勉強会のテーマ

病院看護と在宅医療

### ■プログラム

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 角田直江氏（茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター 看護局長）

病院看護と在宅医療

プレゼンテーション2 山田雅子氏（聖路加国際大学大学院 看護学研究科 教授）

病院看護と在宅看護

#### 2) 討論

### ■座長のまとめ

第6回勉強会は、急性期病院看護師の意識変容を促す（地域の視点、生活の視点をもつ）ための課題についての共通認識を深め、課題解決の戦略について検討しました。

今回の話題提供者は、茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター看護局長 角田直江氏と聖路加国際大学大学院看護学研究会教授 山田雅子氏の2名です。お二人ともに訪問看護の実践者という経歴をもち、角田直江氏は訪問看護ステーション管理者から自治体立病院の看護局長に転身し、山田雅子氏は地域で活動する看護師育成に尽力されています。

今回の企画は、在宅医療普及の大きな壁として、急性期病院の医療従事者の意識（在宅医療を知らない、地域の視点が薄いなど）があり、医師の意識変容を促すことは難しいことから、患者に24時間365日寄り添い、病院の医療従事者としてもっとも人数の多い看護師の意識変容を促すことにより、病院総体としての意識が変わりうる可能性があると考え、急性期病院看護師に在宅医療を理解してもらい、地域の視点をもってもらうための戦略を検討することを目的としていますが、期待以上の内容であり、その迫力に圧倒されました。

話題提供者の講演内容とその後の討議等で、今後の戦略を立てる上で特に印象深く感じた項目は、①急性期病院の看護師の多くは地域の視点や生活の視点をあまりもっておらず、業務では安全管理が優先されている傾向にあること、②地域や生活に視点をおく看護師を育成するためには交流事業が有効である可能性があること、③交流事業を行うためには病院の看護部門のトップの意識を変えることが必要であること、④看護師の意識が変わると医師の意識が変わること、等です。

## 第7回「2015年度在宅医療推進のための会」

【小児在宅医療推進のための会との合同勉強会】

話題提供： 前田 浩利 氏  
医療法人財団はるたか会 理事長  
「小児在宅医療の現状と課題」

奈倉 道明 氏  
埼玉医科大学総合医療センター小児科 講師  
「行政の視点から見た小児在宅医療」

位田 忍 氏  
大阪府立母子保健総合療育センター 消火器・内分泌主任部長  
「小児在宅医療推進のための会（大阪分科会）報告」

佐々木 昌弘 氏  
文部科学省 高等教育局 医学教育課 企画官  
「THE 卒前教育」  
～医歯薬看の学生は今～

日 時： 平成28年1月22日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6F  
ステーションコンファレンス東京 605ABC 会議室

<第7回勉強会 2016年1月22日開催 参加 委員36名（推進の会）10名（小児の会）  
オブザーバー15名>

## ■第7回勉強会のテーマ

「在宅医療推進のための会」と「小児在宅医療推進のための会との合同勉強会」

医学教育に関する報告

## ■プログラム

### 第1部「小児在宅医療推進のための会」との合同勉強会

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション1 前田浩利氏（医療法人財団はるたか会理事長）

小児在宅医療の現状と課題

プレゼンテーション2 奈倉道明氏（埼玉医科大学総合医療センター 小児科講師）

（元厚生労働省医政局地域医療計画課 在宅医療推進室）

行政の視点から見た小児在宅医療

プレゼンテーション3 位田忍氏（大阪府立母子保健総合療育センター消化器・内分泌科主任部長）

小児在宅医療推進のための会（大阪分科会）報告

#### 2) 討論

### 第2部 医学教育に関する報告

#### 1) 話題提供

プレゼンテーション

佐々木昌弘氏（文部科学高等教育局医学教育課企画官）

THE 卒前教育～医歯薬看の学生は今～

#### 2) 討論

## ■座長のまとめ

第7回勉強会は昨年より定期開催となった「小児在宅医療推進のための会」と「在宅医療推進のための会」の合同勉強会として企画され、小児在宅医療に関する話題提供の予定でしたが、急遽、厚生労働省から文部科学省へ異動した佐々木昌弘氏の医学教育について報告を追加し開催しました。

小児在宅医療については3名の報告があり、前田浩利氏が小児在宅医療の全般について、特に小児在宅医療の波及効果と高度医療依存児支援の課題と展望について提示していただきました。昨年度まで厚生労働省医政局地域医療計画課 在宅医療推進室で小児在宅医療政策を担当していた奈倉道明氏には行政の視点からの小児在宅医療について、特に多動な小児在宅医療患者や成人期に入った小児在宅医療患者の問題を含めた今後の課題、そして「小児の地域包括ケアシステム」構築の必要性について問題提示していただきました。また、最後に小児在宅医療推進のための会の大阪分科会について位田忍氏から報告していただきました。

低出生体重児の出生率が増え、その死亡率が低下していることにより医療依存度の高い重症心身障害児が年々増えており、その対応、特に小児在宅医療体制の必要性が高くなっています。また、高齢者の在宅医療との大きな違いとして、高度医療の依存度が高いこと、医療福祉教育の連携が必要不可欠であること、調整役は相談支援専門員であることより医療が入るとその調整が難しくなることなどが指摘されていました。討議では、特に小児の定義等が議論されました。

佐々木昌弘氏の話提供においては、卒前の医学教育（医師・歯科医師・看護師・薬剤師）に在宅医療のカリキュラムをいれていくことの必要性、重要性について新たに認識しました。

## 第8回「2015年度在宅医療推進のための会」

### 【病院歯科と地域歯科診療所の連携】

話題提供：

吉村 光弘 氏

公立能登総合病院 病院事業管理者

「院内歯科の役割と地方在宅医療の現状」

長谷 剛志 氏

公立能登総合病院 歯科口腔外科部長

「病院歯科として地域で担うべき役割とは」

～超高齢社会における「地方型」在宅歯科医療の道標～

西村 元一 氏

金沢赤十字病院 副院長

「がん治療医が患者になって見たもの考えたこと」

日 時： 平成28年2月26日（金）19：00～21：00

場 所： 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー4F  
ステーションコンファレンス東京 402ABCD 会議室

< 第8回勉強会 2016年2月26日開催 参加者 委員39名 オブザーバー 10名 >

■第8回勉強会のテーマ

病院歯科と地域歯科診療所の連携

■プログラム

第1部 病院歯科と地域歯科診療所の連携

1) 話題提供

プレゼンテーション1 吉村光弘氏 (公立能登総合病院 病院事業管理者)

「訪問歯科口腔外科の役割と地方の在宅医療の現状」

プレゼンテーション2 長谷剛志氏 (公立能登総合病院 歯科口腔外科 診療部長)

病院歯科として地域で担うべき役割とは

～超高齢社会における「地方型」在宅歯科医療の道標～

2) 討論

第2部 特別報告

西村元一氏 (金沢赤十字病院 副院長)

「がん治療医が患者になって見たもの考えたこと」

■座長のまとめ

今年度の最後(第8回)の勉強会は、歯科診療における病院と歯科診療所の連携をテーマとし、日本歯科医師会から連携を積極的にすすめている地域および病院を探していただきました。このテーマを企画した理由は、昨年度の歯科診療における地域連携の報告において、急性期病院に歯科がない地域では、急性期病院と歯科診療所の連携が進んでいるが、その逆に急性期病院に歯科がある地域では連携がすすんでいない可能性も示唆されたことがきっかけです。地域連携の進んでいる事例を検討することで、急性期病院の歯科と地域内歯科診療所の連携について、その現状および課題、課題解決のための戦略などを検討することが目的でした。

今回話題提供を行ってくれたのが公立能登病院です。病院事業管理者である吉村光弘氏より地域の在宅医療を含めた医療状況と病院歯科の必要性(歯周病の治療が全身疾患の改善につながること、高齢者の栄養障害に対する食支援の必要性について等)などについて紹介していただいたあと、実際の歯科診療について、担当の長谷剛志氏より取り組んでいる課題について報告がありましたが、その報告は非常に斬新的であり、病院および在宅を含めて今後の歯科医療の方向性を示すものでした。

今回の話題提供とその後の討議で、特に重要と思われたことは、①口腔機能の評価については歯科の専門性が高いこと、②口腔機能のうち、嚥下機能においては食塊形成の可否の評価が重要であること、③人口構造が変わったことにより病院歯科医の重要な役割が、従来の歯科治療から口腔ケア嚥下リハに変わりつつあること、④その意味で病院には歯科医は必要な存在となりつつあること、⑤地域における「食支援」に歯科医は強力なリーダーシップをとれる可能性があること、等です。

なお、西村元一氏は大腸癌外科治療の専門家であり、当勉強会の委員で、特に金沢地域における地域連携体制の構築に尽力されてきた方です。専門の大腸癌には健診を受けて気を付けていたのですが思いがけず専門外の進行胃癌(「余命半年」と診断され、治療のため当会を欠席していました。今回、体調が少しいいので自分の身に起きたことを話したいという申し出があり、お話していただきました。今回の記録には載せておりませんが、ご自身の治療経過やがん医療を受ける立場として考えたこと、そして、現在行っているがん患者支援活動(金沢マギー)について報告していただきました。自分の物語りの最終章を綴る過程を私たちに見せながら、その物語りを私たちも受け継ぐ、そんな思いで聴講しました。彼の最期のスライドに彼の思いとこれまで取り組んできたことが図式化されていました。そして、これもcancer giftであるというメッセージを自分と私たちに送っています。